廣島大學圖書之印

訓點記載の一様式についての報告

小林芳規

訓點記載の原料が、胡粉・朱をはじめ墨、それに稀に緑・青・藍・黄などいずれも毛筆によるスミ（墨）に依っていることは広く知られる所である。しかるに、右以外に、毛筆に依らず、象牙か或いは竹の細い棒で、先端が恰も鉄筆の如く鋭利な用具で、紙面に爪跡の如く圧して、傍訓、字音、ヲコト點或いは文字の異同を書き示した訓點資料の存することが、平安時代の訓點本調査において判明した。白粉は太陽を背にしてはっきりと浮いて来る。この姿勢に気付いて発見された白點本も屢々ある（遠藤嘉基博士「訓點資料と訓點語の研究」、十四頁）。所が右種の爪跡様點は太陽を背にしては無論、太陽に向っても亦見難く、見逃され易い加點様式である。以下の二資料は、いずれも蛍光燈の下で偶然にも目に觸れることができたもので、光線の当り工合で浮び上った。紙面上その部分が圧されて凹んでいるために、光線の反射が異様に光っていた結果気付いたものである。従って二資

料とも才一回目の調査には見逃し、他の調査有も気付かなかったのは無理からぬことと思う。それ程に目に触れ難い訓點記載様式なのである。

私が茲にこのような報告をなし、紙面を汚させて戴くのは、過去において右様の資料を見逃しはしなかったかという恐れと、今後の訓點資料調査において、このような特異な様式のあることの配慮によって、新しい訓點資料が発見されることを期待するからに外ならない。

今夏、五島美術館蔵の経巻・漢籍について同館西村　清氏・三浦勇吉氏・宮崎和雄氏の好意と築島　裕氏の芳情により、調査する機會に恵まれた。その中に、長暦四年（一〇四〇）移點識語をもつ大毗盧遮那成佛経巻第一、一軸がある。重要美術品にして、本文は天平時代の書写、雄勁な筆致で保存も良く書面の美しい逸品である。全巻に白訓點と所々に朱點があり、白筆の上に朱を加えた所もあって白朱同筆で、巻尾にその白筆にて「長暦四一（年）七月一日移點了」とある。

白・朱のヲコト點は別掲の如く博士家點の明経點に酷似しており、仮名字体も当時の様相を示している。加點は整然となされてあり書面の美を保っている如くである。白筆のヲコト點は詳密で全巻にあり、訓下し可能であ

るが傍訓は極めて少い。次が全例である。

○我當上昇……我當擊法鼓

○何以故本性淨故云　○譬如火爐(宋)燼(宋)若人執持在手

而以旋轉空中

○觀大日　○白檀以塗壇圓妙湯茶羅

○并佛子當降　○三自歸命說悔先罪

○香華以莊嚴　○三結脩多羅　○告如是偈言

○何以故若捨　○以偈問佛　○均調　○住於白

蓮上　○標旗量等

右の外には上欄に白筆の注記がある。

「戚」（自）（本文）施與・父母男女親戚・

「麗」（自）（本文）其座極巧嚴

これらは概ね後半部にある。同じく後半部に朱訓がある。朱訓は白訓よりやや多いが全例は次の程度で決して多くはない。

○綜藝　○彼　○如日暉　○相違者　○中年女人

○相入　○滋榮　○胤遇　○襲　○吼怒　△掲梨婆

○鉢孕　○周環　○嚴身　○倆　○為標

○心置三角印　○康檀拏印水牛　○奉瓶

○對處廂曲中　○白蓮臺　○互相間

いずれも本文の漢字の数分の一位の小さい字で、本文の美観を損わないかの如くた記入さ

れている。右の外の書入は欄外に朱筆で「大師御筆本共无二字二本」「云何世心、此四字多本无之但大師御筆在之今一本令止給」等あり、一、二、の符号等があるが整然と美しく書き加えてある。

さて爪跡様訓點というのは巻中程と巻末近くとにあって管見では次の諸例が見付かった。

[　　]の中が爪跡様訓である。

○糠糟・灰・剡・骨・朽木等及蟲蟻蜣蜋毒螫之類

（カス）（アラスミ）（クモ）

○礫石・砕互・破器・

○離如是諸過遇良日晨

○身色如日暉

（ヒカリ）（朱）

○唯依於有着 相 ト(白)

○生 ナ 種姓清淨

○善弐摩訶薩所 カノ 畫・甚微妙 ト云(朱)

○應善圖藻 纘 「會立」(音)(朱) 胡對反

仮名字体から見るに白筆の長暦の頃のものであり、白朱訓點加點者の手になると見られる。

他の資料は、大明王院藏漢書、周勃伝残本（黄麻紙三紙）で、去る三十六年九月、東京の某百貨店における高野山秘寶特別展において蛍光灯下に見られたものである。初日に拝見した折には見逃し、築島氏の教示で翌日改めて見得たものである。この方は爪跡様の仮名の外に、先の細く丸い象牙様用具で圧した風のヲコト點および声點らしきものもある。別に墨筆のヲコト點および小字の仮名が少々存するが、爪跡様の訓は墨筆のより大字である。爪跡様

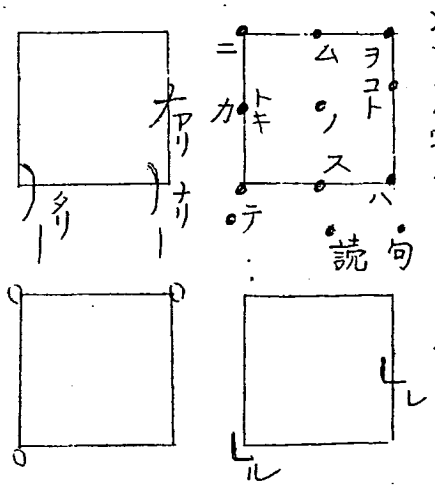
點も墨訓點も全巻に亘って付けてある。この書の本文は秀抜な筆致で平安初期を下らない。ヲコト點は別掲の如く、博士家點の紀傳點で、墨訓は仮名字体から見て凡そ天暦頃かと見られる。仮跡様訓も墨仮名と同字体か、やや古めかしく恐らく同期頃であろうと思われる。仮名字体について他に注意すべきことは、平仮名「え(ム)」「しめ」などを含んでいることでかの武居　巧氏蔵(漢)書揚雄伝天暦二年點と相通ずる。かつ、ヲコト點の形式も類似している(左中星点を「カ」「トキ」に用い、「ナ」(アリ)の點、右下「了」(ナリ)など)から、天暦二年點と関係があるものと思う。

今仮跡様點の仮名訓例を示す。

○ 項(ア)之(テ)復定吳奔壁(ノ)東南(ノ)陳(ニ)(ソウ)

○ 迺(テ)外而(テ)去(ヲ)亞夫出精兵

漢書周勃伝のヲコト點



○〻（王）凜（去声）心（悲）棄其軍與壯士數千人亡走

○吳楚破平又（又）

○為堤由此（か）（に）し（と）

○甚重之上廢栗（入声点）太子（を）う（う）

○上由此（に）疏之（ウトえ久）

○夫（と）之短寶大后曰（乃（ノたまはく））

○上讓（しめ）（シメテ）曰（墨訓「由ハ」）

○人生（と）各以（を）時（て）行（て）耳（墨）心（ハマクノ（ミ））

○帝（早）越（ナム）侯信也（ニ）

○天下共撃（ムキ）之今信（ハ）雖（モ）皇（の）后兄無功

○王徐盧等五人降（る）（平声）

○上欲侯之以勧（すゝム）（か）（子）後（を）

○獨置大（る）蔵（を）（こしむら）（里訓）「しゝえう」とあり（こゝムラ）

○甲楯五百被可以茎（ちゝン）（？）

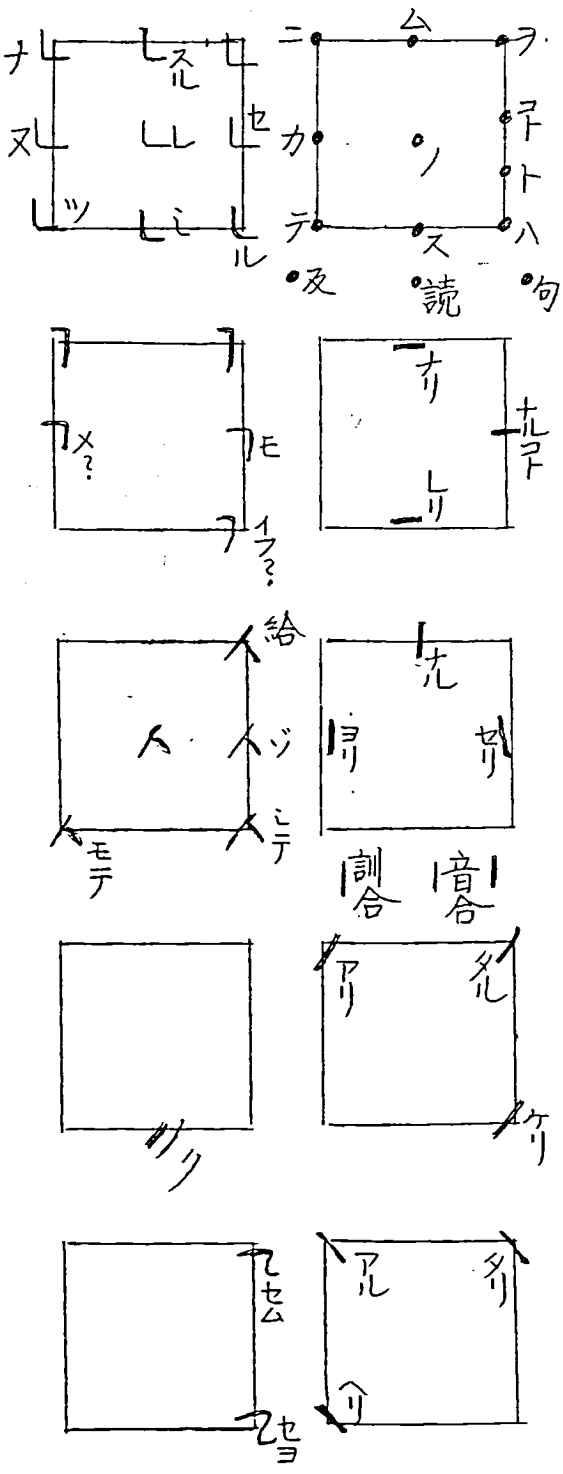
○取扁苦（しわ）之不予銭（こメ）

右の両資料に共通するのは次の點である。一はヲコト點が共に博士家點であること。二、年代が平安中・後期であること。三は共に本文が美麗であること。博士家點と凡跡様點との関

係は偶然か否かも分らず未詳であるが、かの平仮名が又博士家點ないしは、才五群點に限って表われることと関係があるかどうか。後者は推測の域を出ないが、仮に考えるに、書面を汚すまいという意識が強く働いていたものであろうか。傍訓が少なくかつその書き加え方が小さく、或いは欄外等にすることと関係があるのではあるまいか。更に多くの類例の発見を願って止まない。

（三七・九・九　重陽）

大毗盧遮那成佛經長暦四年白點のヲコト點



「附　記」

稿成って後、漢書揚雄伝天暦二年（九四八）点にも朮跡様点らしきもののあることに気付いた。

複製本四枚目ウ二行目の

云（こに）・走乎彼蒼吾（に）。馳江潭之汎溢（なるに）兮

の「汎溢」の右傍に「八レ一」（ハムイツ）、「走」の右傍に「〇□□」（ワ「？？ル」）の朮跡様のものがある。

十枚目ウ三行目の

流星旄（レモ）

の「旄」の右傍にも「レ毛」が見える。

光線の加減のためか殆ど同じ位置である。吉沢義則博士の教文（国語説鈴）では全く読んでいない。肉眼で見難いものが写真用のライトで却って浮び出たものであろうか。この箇所は紙の繊維までよく見えている。しかも、この複製本は大版であったためのこともあろう。

天暦二年点は吉沢博士によると、朱・墨・才二朱・粉（白）・黄・青の六度の施點があるという。墨は無論、朱も青も黄も複製本では明かに判讀できる。白粉がやや難読であるが、白粉は先太で書かれていて、爪跡様点が細く紙面を圧し傷つけた如くであるのとは異なる。その目で全巻を見ると、それらしく思われる所々があるが、複製本のこととて隔靴掻痒の感を如何ともし難い。